鼎談「作家・中村地平」

宮崎大学名誉教授　岡林　稔
一般財団法人台湾協会評議員　河原　功
美術家兼映画監督　小松　孝英

※鼎談者前の座卓に設置したＩＣレコーダーで記録した音声を時系列で文字を起こし、
質問者を除く鼎談者三名それぞれに内容を確認していただいた原稿である。

【司会者】

定刻が参りましたので、今年度の文化講座、午後の部の、鼎談「作家・中村地平」を始めさせていただきます。鼎談ということで、三人の方に来ていただいております。

午前中は「中村地平と台湾」というタイトルで講演していただきましたが、その折りの講師・河原先生をはじめ、前に座ってらっしゃるお三方です。

では、河原先生も含め、もう一度、三人のプロフィールをご紹介させていただきます。

皆さんから見て向かって一番右手が、河原功先生です。

先生は東京都のご出身で、成蹊大学大学院修士課程を修了後、成蹊高等学校の教諭として教鞭をとっておられました。その傍ら、台湾文学について東京大学や成蹊大学、日本大学で非常勤講師を務めて来られました。現在は一般財団法人台湾協会評議員を務められております。

一九六九年、初めて台湾へ渡られたときに台湾文学の存在をお知りになりまして、それ以来、未開拓だった台湾文学研究に取り組んでおられます。代表的な著書であります『台湾新文学運動の展開』は、同名で修士論文でもあるわけですけども、当時「世界で最初の台湾文学史」でありますとか、「台湾文学研究のパイオニア」と言われるほど高く評価されたものになっております。

それでは続きまして、真ん中になります。岡林稔先生です。

岡林先生は、高知県のご出身です。土佐高校卒業後、早稲田大学第一文学部英文科へ進学されました。そのまま大学院に進まれまして、修了後ここ宮崎の宮崎大学へ赴任されました。

その頃から中村地平に関する研究を進められております。教授を務められて、退官された後も地平に関する研究を継続されておりますが、中村地平も関わった文芸同人誌、地元の『龍舌蘭』の発行にも努めながら、文芸評論家としても活動されております。宮崎大学の名誉教授でもあります。二〇〇二年に出版された『《南方文学》その光と影―中村地平試論』（鉱脈社）では、その翌年に、第一三回宮日出版文化賞を受賞されました。一昨年には宮崎県文化賞、文化功労も受賞されております。

それでは、お三方目のご紹介です。小松孝英さんです。

小松さんは宮崎県延岡市出身のアーティストです。九州デザイナー学院を卒業され、その後、様々な文化活動をされておられますが、ロンドンや香港、スイス、台湾など世界一〇カ国で個展を開催されたり、アートフェアに出展されたりしておられます。企業とのコラボレーション作品も作っておられまして、その作品は国連関係施設や海外企業にも、多数いま展示されているところです。

近年では、皆さんご存じのとおり、塩月桃甫や中村地平のドキュメンタリー映画、これらの制作立案、脚本・監督も務められて、美術家以外にも映画監督という肩書きがついておられます。美術家との二刀流ということで多忙をきわめておられますが、今春のドキュメンタリー映画「中村地平」が宮崎県民に作家・中村地平という人はどんな人なのか、ということを再認識させてくれる火付け役になったといっても過言ではないと思います。延岡出身ということで、延岡市の観光大使も務めていらっしゃいます。

以上、この御三方に「作家・中村地平」についてお話をしていただくということになります。それでは、岡林先生よろしいでしょうか。引続き進行をお願いします。

【岡林氏】こんにちは。進行役を務めます岡林でございます。

いま紹介があったように、約二〇年前に書いた評伝が、小松監督の映画で、このようにスポットライトを浴びることになったので、忘れられていた地平の本が一気にスポットライトを浴びると同時に、いろんな方が地平に関心を持つようなきっかけを作ってくれた、私の息子のような、いや中村地平が一九〇八年生まれ、私が一九四二年生まれ、そして小松くんが一九七九年生まれ、そういうふうにだいたい四〇年ぐらいずつの世代間隔で来ております。そんな中で今日午前中の講師の河原先生は、特に台湾文学に詳しいオーソリティーでありますので、その先生を加えて、そしてこの三人で話を進めていく進行なんですけども、まず最初にこのタイトルが「作家・中村地平」でありますので、いちおう私の方で準備しました、中村地平の文学作品年譜を中心にしたハンドアウトに沿った進行にさせていただくことにします。

実はこれは高校生を対象にした講演会で、中村地平の「戦争と文学」という話で使用したときのものであり、それを少し手直ししました。

こんなふうにしてたくさんの方が、中村地平に関心を持ってくださいましたけども、実はこの二〇年ほど必ずしもそうではなかったのでした。例えば僕がこの評伝を書くに至った背景にもなってますが、毎年、中村地平のことを偲ぶ地平忌が大体彼の命日の二月二六日前後の土曜日に行われていたんです。皆様は市民の森に文学碑ができたのをご

存じでしょうか。あそこにできたころから、毎年恒例の地平忌が二月の土曜日に行われておりまして、それに僕もずっと参加しておりました。それが一つの大きな評伝を書くきっかけにもなったんです。さらに宮崎子ども文庫連絡会というのがございまして、この人たちが私の本が出た少し後に、郷土の作家中村地平の童話に近い、この民話を改めて子どもたちに読んで欲しいと、『河童の遠征』という宮崎の民話を集めた本を復刻したんですね。鉱脈社から出ております。この復刻版を作るに至ったこの会の方々の動きが出てきて少し変わってまいりましたね。地平忌には玲子夫人とか、弓子さん、槇子さんお二人のお嬢さんも出てこられて、そしてその周りに中村地平の旧知の方々たくさん見えたんですけれども、そこの白板にピンアップしてありますように、実は二〇〇八年、ちょうど生誕一〇〇年に、宮崎で日本社会文学会の全国大会がございまして、その時に地方の問題、地域の文学をテーマにしながら、片方で併行しまして、ここ宮崎県立図書館を舞台にして、生誕一〇〇年祭というものも、行事として行われたりいたしました。

こんなふうに中村地平を顕彰する一つの手がかりになるような行事もあったんですけれども、この当時私が中村地平についての講演はボチボチと頼まれることがあったものの、とにかく中村地平という作家のことを知らない方もいたものですから、いつも当時の講演のタイトルは「北の太宰、南の地平」という、太宰と抱き合わせでさせてもらってたんですね。

そして、先ほどの地平忌のことお話しましたけど、そこには実は宮崎の画家で、中国との日中戦争に輜重兵(しちょうへい)として、要するに馬の世話をしたりする兵隊として派遣された画家の坂本正直(まさなお)さんがいつも出てくださっておりました。僕に何度も何度も評伝をまとめろというアドバイスをしてくださった方なんですが、その方の遺作展が今ちょうど隣の宮崎県立美術館で開催されていますが、これも奇縁ですね。坂本氏の長女・所薫子さんとお話をして、「とても不思議な縁を感じます。父があれほど崇拝していた中村地平の、鼎談そして講演があるときに隣の美術館でこのような遺作展ができることを幸せに思います」とおっしゃっておりました。

そんな中で、この鼎談を始め、改めて宮崎で中村地平という作家を少しでも、本質にまで至らなくても、皆さんが他県の方にいろいろ聞かれたときに、中村地平はこんな人だというようなことをお話できるように話が進めばいいかと思います。

おわかりのように、県立図書館が文化講座の一環としてこのテーマの講座を挙行するようになったのは、小松監督のドキュメンタリー映画「中村地平」によるものがとても

大きいわけであります。最初に塩月桃甫の映画を作ったことから始まったというふうに聞いております。塩月桃甫から中村地平に至って映画を作ろうという気持ちになった経緯を、小松監督の方からお話をいただければと思います。また宮崎県だけではなくて東京、大阪、さらに台湾で上映会が行われてます。その全ての場所に小松監督は行ってお話をしてるわけで、各地での中村地平の映画、あるいは中村地平という作家に対する反響で特に印象に残ったもの等がありましたら、それも紹介していただきたいと思います。まず最初に出会いのところから。

【小松氏】私が本業でアーティストをしてるので、この一〇年ぐらい台湾、香港、シンガポールに自分の絵の展覧会だったり、自分が出品する国際アートフェアのために行ったりして、台湾は本当最初ただ絵を売りに行くだけの場所でした。

僕は湾生（台湾生まれの人）の子でも孫でもないし、台湾とは縁もゆかりもなかったんですけど、その中で二〇一七年ぐらいに日本統治時代の展覧会が台北で開かれていまして、最初に台湾に西洋美術を入れた人、そして台湾美術展覧会を作った人が宮崎県出身だということを耳にしました。それから台湾でいろんなことを見たり調べたりすると、塩月桃甫という宮崎県出身の人があっちでは教科書に載るぐらい有名な人だった。でも日本ではほとんどの人が知らない。そしてそれに続く教え子の中村地平その人も、台湾文学ですね、戦前の日本統治時代の台湾の小説を残した人として、塩月桃甫ほどではないですけど、研究者がいたりして知られていたと。自分と同じ宮崎県出身の人が一〇〇年前に台湾へ渡って、そこにはすごく頑張ってた足跡がありました。

僕ら世代はほとんど知りませんでしたので、これはなんとか、もう一回記録に残さなきゃいけないなと思い始め、忙しくてあんまり最初のうちは手がつけられなかったんですけど、調べていくと、川南の骨董屋さんで、床に置かれてる台湾原住民タイヤル族の少女の絵をたまたま見つけたんです。戦前・戦中ぐらいの絵なのに、台湾原住民のことを描いた人がこの宮崎県に居たとか、いろんなことがわかってきた。戦前の同化政策とか皇民化政策の中で、桃甫が現地の台湾原住民の文化とか風土とかに魅せられて守ろうとしていた人だったことや、さらに台湾文学で中村地平も、当時の原住民のことだったり、戦地の人たちの文化を伝えてたりした人だったということも途中からわかって、いま多様性の時代として当時同じ宮崎出身の人がそこまでやっていたことを、何か形に残そうということで、ドキュメンタリー映画を作りました。

【岡林氏】各地での反応に何か感想がございましたら。

【小松氏】先々月に台湾の桃園映画祭に招待出品させてい

ただいて、ドキュメンタリー映画の「塩月桃甫」と「中村地平」の両方を上映させていただいて、台湾では今、日本統治時代ブームって言っていいのか、八〇年代より前までは戒厳令時代で、あまり日本統治時代のことを探ったり良く言ったりすることは駄目な時代があったんですけど、いまの台湾の若者たちは結構日本統治時代のことを調べていて、そういう人たちからの熱い質問だったり、興味ある人たちからの反応があったり、台湾はとにかく観る人が若い。日本で上映会すると年配者が多くて、若い人はあまり興味持ってもらえないと感じる。あと東京でも、河原先生と一緒に日本大学とか、台湾文化センターとかで上映をさせていただいて、そちらでは湾生（ワンセイ）と言われるその台湾生まれの人達の子や孫の人たちや台湾好きの人に来ていただいたり。宮崎県から台湾に戦前はたくさんの人が行っていて、たぶん皆さんの中でも親族で台湾生まれの人がいると思うんですけど、その辺のロマンを感じられる人たちにとってはすごく、いいものを届けられたなという反応でした。反省点はまだまだ若い人たちに興味を持ってもらえてない。日本と台湾の歴史をいま勉強しないですから、僕らも習ってないし、事実上方法がないので、そういう反応はありました。

【岡林氏】はい。宮崎県での観客、あるいは関心を持ってくれる世代がやはりシニア層になってたっていうことは、僕も一緒に回ってて感じたところであります。

それでは、作家・中村地平についての本論に入っていきたいと思います。お手元のハンドアウトに従って、少し最初の方から、特に午前中は河原先生にも詳しくお話をいただきましたけれども、まず最初のところ、旧制宮崎中学校から旧制台北高等学校に進学した当時のことで、そこに書いてますけど、中村地平が、神経衰弱と当時呼ばれていた病気になってちょっと弱い存在、弱い部分を持った弱者であったということ、その弱者というものからの文学者への道、というものの可能性をお話したところでした。エピソードとしては、当時一八歳になって宮崎から日豊線でで門司港まで夜行で行くときに、その当時、やがて相互銀行となる会社の社長である、お父様に付いていってもらっていったんですよ、一八歳の男の子が。そして

門司港でキールン（基隆）に向けて出る船の、ランチ（原動機付きの小型船）が出るときに、電報の頼信紙に「ブジツイタ　アンシンセヨ」とまで書いて、それを地平に渡して、向こうに着いたらこれを郵便局で出すんだよとか言ってね。そしてまた、もし体の具合が悪くなったらいつでもいいから帰っておいで、というような、とても過保護的な状況だったんですけども、そんな中村地平が台北高等学校に進学いたします。

午前中は、当時の試験は福岡であったことを河原先生から伺いましたけども、数学の試験がなかったことなどを含めて、台北高等学校に入学した当時の文学活動、同人雑誌『足跡』で文芸活動したことを知られてると思うんですけども、それ以外にいろんな演劇活動も率先してやってたことなど、エピソード等含めて、河原先生の方からお話いただきましょうか。

【河原氏】先ほどもお話しましたけど、九州には旧制の高等学校が四校ありまして、最初にできたのが熊本の第五高等学校、その次が鹿児島の第七高等学校になります。地平が台北高校に行く、比較的近い頃にできたのが佐賀高等学校、佐賀は一九二〇年の創立です。そして、福岡高等学校が一九二二年。高等学校が四県、七県のうち四校が九州にありました。さらに長崎には、高等学校ではないんですけど、長崎高等商業学校というのがありました。結局、高等教育機関としてないのが、大分と宮崎という、そういう状況でした。新設の高等学校っていうのは入りやすいですよね。ですから、地平は福岡でもよかった訳です。そして、なおかつ、文科の受験科目に数学がなかったという点では、佐賀高等学校が彼にとっては非常に有利だった。わざわざ台湾までいかなくてもですね。そういう中で、数学がなかったことは、台北高等学校を受験する一つの要因ではあったけれども、それだけじゃないということになります。

それで、やっぱり佐藤春夫の作品に魅せられてということですが、中学時代の地平は、漱石の作品に憧れて、第五高等学校受験を考えていたんです。したがって、どういう経緯で台北高等学校に進学を決めたのかというのは、検証する余地がまだまだあると思ってます。

ただ、岡林先生がおっしゃったように、彼は、いよいよ台湾の高等学校に行くにあたって、非常な戸惑いを覚えていたということは事実で、それはいろんなところで書いてるので間違いない。それでも台湾を選んだという理由が、ちょっとやっぱり見えてこない部分がある。

同期に入学した鹿野忠雄のように、台湾には蝶がたくさんいるから、それを目当てに行くと決めた明確な理由とはちょっと違いがあるような気がします。ただ入学してからは、彼は台湾の高等学校に入ったことを非常に喜んでいますね。精神的に開放感を得たんだろうと思います。最初の

ところはですね。

【岡林氏】お芝居、演劇活動の方は？

【河原氏】高校一年のときに、「山の神々」という脚本を書いて上演しましたし、それから二年のときは、記念祭で脚本部の責任者になります。第一回記念祭のときに、「順番」という、菊地寛の書いた作品の上演があります。これに出てくる主人公役は、『あをば若葉』という作品の中では平沼が務めます。彼は演劇に夢中になって、結局発狂してしまう。そして入院中に腎臓病で他界するのですが、同じような話は実際にあって、地平と同じ級友か一年下かと思いますが、平田藤吉郎という学生がいまして、彼も演劇の方で活躍はしたけれども、結局そのあと京都帝大に入学したんですが、在学中に気が変になって亡くなってしまう。その彼の話も作品の中に織り込まれているという感じです。とにかく演劇は台湾の台北高等学校の最大の催し物でしたので、一般の人たちからも絶賛を受けて期待もされていたということであります。

【岡林氏】意外と神経衰弱であったというようなイメージと違う形で、実際に入学した後の台北高等学校での、彼の文学活動、あるいは青年劇としてのいろんなお芝居に積極的に関わっていた姿から、段々と作家の片鱗が見えてきたような感じでもあります。

次の項目に進みたいと思います。ハンドアウトの二のところで、「小説家への進路」と書いております。ちょうど中村地平と同年生まれであった、宮崎大学教授でもあり、『龍舌蘭』同人でもあった長嶺宏先生は第五高等学校から、飛び級で東京帝国大学国文科に入学したということであります。それに対して、彼（地平）は数年遅れて東京帝大の美術史学科に入学するわけです。

これはちょうど太宰治（津島修治）と同じ入学年度であって、太宰治は、卒業はしなかったけど、仏文科に入学してるわけです。仏文科を志望しておりながら、入学試験場では、試験官に向かって「僕はフランス語ができないんだけど」ってなことを言う男がいたことを、「失踪」という小説の中で中村地平が太宰について書いている。脚色もあるかもわかりませんけれどもね。そういった形で、いよいよそこに小説家への進路として、東京帝大に入って井伏鱒二門下での、太宰らとともに彼の作家活動が始まり、いろんな文芸活動をしていくわけです。

このあたりから本がたくさん出版されます。実は最近になって、私自身も読んだことも、手に取ったこともないような中村地平の書いた作品を含む雑誌の類が、小松君により発見されています。先日は濱田隼雄の『南方移民村』とか、地平の『蕃界の女』の初版本を見つけたとか言って、僕に報告してくれるんです。また、昭和一六年に出た『小学三年生』（小学館）という雑誌、その中に中村地平が書

いた、なんと童話「とんぼとあり」がある。そんな文献まで見つけてくれるんです。そこで小松君は画家ではありますけれど、みずからの絵があちこちからコレクターに選ばれていく身分でありながらでしょうか。たくさんの初版本、地平に関する初版本とかいろんなものを集めるけど、どんなふうな関心から、どんなふうにして集められましたか。

【小松氏】いま県立図書館で開催している中村地平展にたくさん僕のコレクションを貸していますので、帰りに観てください。宮崎には文学館がないので、牧水のはありますけど、中村地平とか近代史ミュージアム的なものもいずれつくりたいなということで、塩月桃甫、瑛九、中村地平の資料とか、作品を集めていたんです。だんだんその地平の同級生の濱田隼雄とか、鹿野忠雄の本とか、同時代の日本統治時代の台湾に関する本のパッケージ装幀のデザインや、絵が好きで買ってたんですけど。だんだん先生たちのコレクションを見ていると、燃えてきてコレクターになってしまいました。あとさっきの話なんすけど、地平が記念祭で劇をしたりした台北高等学校は今でも校舎とその講堂が残っていて、台湾師範大学として使われています。ぜひ皆さん台湾に行って、そういうところを巡って欲しいですね。

【岡林氏】ありがとうございました。

今お話がありましたけども、高等学校から作家を志望した四人の友人の一人として濱田隼雄の話が出ました。宮崎と違うんですけども、同じように地方の仙台から台北高等学校に入り、文学活動をして、同じように作品を書いていた。同じような環境であった濱田隼雄について、特に『南方移民村』の初版本等のことにつきまして、一言お願いいたします。

【河原氏】濱田隼雄は、台北高等学校では、クラブ活動としては絵画部に、地平は文芸部に属していまして、二人とも非常に仲が良い間柄で、濱田隼雄は台湾文壇では、代表的な作家として大成していきました。『南方移民村』という本、先ほど画像でも出しましたけど、あれは代表作の一つであります。

仙台出身で、彼の場合は、どちらかというと社会運動家に近い感じで、台北高校を卒業した後、東北帝大に入って、その段階で社会運動に大きく関わって、結局、日本国内では煩わしいと思ったんでしょう、台湾に渡って、台湾で学校の教師を務めながら作家活動をしていきました。

雑誌『足跡』は、濱田隼雄、そして、のちに都新聞社に入社した土方正己、桃甫の息子である塩月赳（たけし）、それと中村地平、その四人が言わば中心になって創刊したんですが、三号まで出したところで、次の号は濱田隼雄が担当するところでしたが、濱田はその辺りで『足跡』を編集するについては、ちょっと気が乗らなくなって、結局『足

跡』は三号で終わってしまいました。

仙台に仙台文学館がありますが、そこに濱田隼雄の様々な資料が寄贈されておりまして、『足跡』はなかなか見ることのできない雑誌ですが、国内ですと仙台文学館にあります。

濱田隼雄には原住民を書いた小説がほとんどありません。それから、台湾人もほとんど書かないんですね。一篇ぐらいしかなくて、大半が台湾にいる日本人を書いていきます。濱田隼雄の作品、私は非常に好きなものが多いんですけれども、「公園の図」という短編なんかは台湾の町並みの様子がよく描かれていて、非常に印象に残るものがあります。濱田隼雄については、以上です。

【岡林氏】何かコメントがあれば、どうぞ小松さん。

【小松氏】仙台文学館か、河原先生の書斎にしかその『足跡』って雑誌は現存していません。

【岡林氏】今日そこの特別室で、「中村地平の足跡」というタイトルでの資料展、あそこの大半のものは小松さんが集めたものでありますし、特に今まで僕が書いた本の中で触れることがなかった、書簡ですかね。特に奥様、玲子さんに宛てた手紙とか、中村地平の、文学者である前に人間である側面が読み取れます。意図して書かれてない、見せることを意図して書かれてない私信がありますので、まだご覧になってない方はぜひ見て欲しいと思います。

そんなふうにして台北高等学校を卒業した人たちが各地、本土等でもずいぶんと活躍していくことになります。もう一回ハンドアウトに戻りまして、「小説家への進路」の中で一九三二年に「熱帯柳の種子」を発表しました。これが文壇デビュー作になりますけれども、この作品につきましては、とにかく当時は自分が内地から来た、日本人であり、いわゆる宗主国の人間であるという、一種の植民者優位の政治体制の中で、ともすれば自分もそういった立場に立ってしまう青年・地平の、虚無的な心の痛みを書いた作品でもありました。さらにそれから進展していきまして、午前中のお話の中でも河原先生の方から熱く語られました一九三九年の「霧の蕃社」、これは一九三〇年の霧社事件に取材し、いわゆる原住民の生存権、弱者側に立つ中村地平の、当時の原住民の側に立った点で初めて書かれた霧社事件の作品であります。だけど実際には霧社事件を鎮圧するために台湾総督府が、あるいは警察等が取った態度、例えば反乱を起こした民族に対して、日本側に与みしている原住民たちを使ったり、また軍隊が近代兵器によって鎮圧するわけですけれども、それと同時に、この反乱を起こした人たちを件の別部族が襲う、いわゆる第二霧社事件についての言及はないが、地平が最初に作品化したという説明がありました。

さて、先ほどから出てるように、中村地平、あるいは塩

月桃甫には、原住民族への関心というものがあったからこそ、その弱者である、彼等の側に立った姿勢で書くっていうことができたと、お話になったかと思います。ここで今私たちが、例えば台湾各地を旅行しますと、特に南の方に行きますと原住民族の村があったりして、原住民族衣装を使ったりして古代からの舞踊とかを見せるわけです。何か、それを見ると少数民族を観光の目玉に使ってるような、そういった側面もあって嫌な気もします。一九三〇年に霧社事件、原住民たちの反乱事件の最たるものがあったわけです。原住民に対する関心というものを、ここで改めて考えてみたいと思います。

今さっきもありましたけれども、原住民の認識に関して小松さんが映画で最初に取り上げられた塩月桃甫の絵の中に、「母の像」という霧社事件で鎮圧された原住民族の悲哀を描いた、母親が子供をだっこして、その遠景には鎮圧軍から火をつけられた部落が燃えてる姿とかありますけれども、その塩月の絵は、原住民の少女のほかにも原画が、県立美術館にはたくさんあります。画家である小松さんから改めて原住民あるいは「母の像」とか、そして塩月桃甫及び中村地平のことを踏まえた原住民への、彼ら両作家の興味を持ったところをお話いただければと思います。

【小松氏】当時、ゴーギャンみたいに南の島に行って原住民を描くっていうところを、塩月桃甫は重ねて大正一〇年に台湾に渡ったんですけど、塩月桃甫の日記を見ると、すぐに原住民探索の旅にタロコの方に行ったり南の方に行ったりしていて、彼のアトリエはもう原住民の模様の布だったり、置物っていうんですかね、土偶みたいな、ああいう民族的なもので溢れていたっていう文献を見ました。原住民の文化、模様だったり色とか暮らしにしっかり魅せられて、最初の頃の台湾原住民の彼の作品は、火祭りだったりいろいろ楽しそうなんですよ。日中戦争が始まったあたりから、もちろん霧社事件の後に発表した作品も、原住民の顔はすごく恐怖とか怒りとかそういうものが感じ取れる表情の絵だったんですけど、戦時体制になってから彼が描いた原住民の絵は、だんだん瞳がなくなっていったり、暗くなっていきます。戦後、宮崎に引き揚げてから回想して描いたものは、またちょっと明るくなって

きたりとか、何か年代別に彼の作品を見てるだけでその時代背景が見えてくるというか、それを原住民に結構描いて出していた画家だったなっていうのは、口では言えない時代だけど作品にはやっぱり、すごく言いたいことが読み取れるというか、そこは地平も一緒なんですけど、そういうのは感じました。

【岡林氏】その台湾の原住民だけじゃなくて、ごく一般の漢人としての台湾の人々との関係も少しお話しておかないといけないと思います。河原先生にお聞きしたいんですけども、塩月桃甫の絵そのものと同時に、台湾の美術界をリードした非常に大きな功績があることを御本でも読みましたけども、改めて今、塩月桃甫の絵画そのものではなくて、台湾の美術界をリードしていったお話を少し挟んでいただけますでしょうか。

【河原氏】台湾では台湾美術展覧会、いわゆる台展とか、あるいは府展つまり台湾総督府美術展覧会とか、そういうのがありまして、かなり台湾の美術界は盛り上がっていたと私は思います。

それもやっぱり塩月桃甫という西洋画でリードされた方がいるのと、石川欽一郎という画家がいまして、この人もかなり台湾では活躍をされました。それから、学校の教師として画家がたくさんいます。ですから、台湾での美術界は、日本国、内地と同じように盛んだった、というふうに思います。

とりわけ桃甫は人気がありまして、いろんな雑誌や単行本の装幀も手がけているんですね。画題が幅広く、先ほど『翔風』にあったように、創刊号と第二号は著しく異なる表紙になるんです。でも彼がいちばん好きだったのは、やっぱり原住民を描くことですね。それを描いた作品がたくさんあります。

それから、塩月桃甫が割に話題にのぼりますけど、塩月桃甫展は何年前でしょうか。こちらで岡林先生たちに初めてお会いした二〇〇一年ですか、県立美術館で大きな展覧会がありまして、そのとき私から塩月桃甫が装幀した本を展示用にお貸ししました。

台湾の画家で評価されてるのはもう一人いまして、立石鐵臣（てつおみ）です。鐵臣（てっしん）とも言いますけれども、彼の展覧会が数年前に、東京の府中美術館で開催され、展示開催中に図録が完売するという、美術館としては有り得ないような人気を博したことがあります。鐵臣については、銀座の画廊でも展示が行われたんですが、府中美術館での展覧会は素晴らしかったです。

さらに宮田弥太郎という人がいます。台湾で出ていた雑誌で『台湾芸術』があるんですが、これの表紙をほとんど手がけた、この人も人気です。『台湾芸術』は六三冊発行されたんですけれども、この間三八冊ぐらいですね、台湾

のオークションに出まして、揃ってはないけど、八万元。台湾元とのレートが一対五ですから、四〇万円ですね。それがスタートラインで、私持ってないところが若干ありましたので、どうしても欲しくて、二〇万元まではお願いするように仲介する人には伝えたんですが、落ちたのはなんと五〇万元。二五〇万円、ちょっと手が出ないです。それだけ今、台湾での、日本統治時代の絵の評価っていうのは高くて…。

【小松氏】やっぱり台湾、日本が引き揚げたあと国民党が入ってきてから、日本統治時代のものはほとんど焼却処分だったので、雑誌一つ、作品、絵もそうですけど、ほとんど残っていない。それを日本だったら偶（たま）に出てくるということで台湾の人たちが日本で探していたり、いま台湾の人たちが探しているものは河原先生の家でいっぱい見ました。

【河原氏】取り掛かったのが早いだけの話なんですけど。

【小松氏】そうですね、戒厳令時代からね、台湾に出入りして、（七〇年代から）それと二〇〇一年だから二三年前に宮崎県立美術館が「塩月桃甫展」を一度大きくやってるんですけど、そのとき僕は宮崎に居なくて学生だったので知らなかったんです。その時に塩月桃甫が表紙を描いてる台湾時代の本や雑誌を貸し出されている。

なぜそういう時代から先生たちは、台湾文学だったり中村地平だったりの研究をされていたのかという感じです。

【岡林氏】いま古い本の話が出ましたけども、単なるコレクターじゃなくて、これがやはり将来いろんなことが議論されるときに、ただ、印象だけじゃなくてきちっと裏付けされた論拠になりますので、大変なお金がかかるようでありますけど。是非、これ、続けていただきたいと思います。

今日午前中の河原先生のお話は、すべて自分の手元の資料に基づいたことばかりでしたからね、特にそんな印象が強いわけであります。台湾と日本の関係っていう中で、何年か前、直行便が台北と宮崎の間にあったときに、何度か若者たちも連れていったことがあり、台湾が植民地であったことを知らない子はさすがにいなかったんですけども、かつてアメリカと真珠湾の事件から戦争が起きたということは知らない若者も多いと聞きます。台湾と朝鮮半島の対日感情の違いというものをいろんな所で聞くわけですけれども、とにかく一九四五年、日本は敗戦して、いわゆる「光復」という、光がまた元へ戻るという形で台湾の人々は、これでやっと日本の統治、日本の支配から逃れて自分たちの母国に復帰するんだということで、そしてキールン港に入ってくる国民党の兵士たちを迎えたわけですね。

ところが、共産党の毛沢東との戦いの中で、すっかりやられてしまった国民党の兵士たちは中国大陸からやってきた。ちゃんとした軍服ではなく蓑笠に草履姿で鍋釜を提げ

て入ってきたというふうにも言われております。
　それまでは大変厳しい日本の統治下だったのが、そこに自分たちの母国の軍たちがやってきて、再び自分たちの国に復帰できるんだという期待を裏切るようなエピソードが残っている。笑い話にもならないんだけども、中国大陸の中でのインフラが整ってない所から、台湾にやってきた国民党の兵士たちは、水道の普及ぶりに驚いたわけですね。とにかく蛇口というものをひねったら水がジャージャー出てくる。金物屋に行って兵士たちはその蛇口の部分を買ってきて、それをいきなり壁にぶすっと差し込んで、ひねっても水が出てこないとか。当時まだ残っていらした日本人のお医者さんの話なんですが、往診するときに自転車を使ったそうですが、いろんな医療器具が入った鞄を持って、荷台に乗っけて往診していると、大金を抱えて運搬してると間違えられて、何度か襲われたことがあったとか。そして、新しい政府、国民党政府のもろもろの圧政が「二・二八事件」というようなものへ及んでいく。いわゆる日本人の残した歴史の功罪についてはまた後の方で触れたいと思います。
　それでは、次の話を進めるために、もう一度ハンドアウトをご覧いただきたいと思います。
　今、「小説家への進路」の中で、一九三九年の作品「霧の蕃社」、いわゆる一九三〇年の霧社事件に関する原住民のお話をしたわけでありますけれども、一九三七年に「土龍どんもぽっくり」とか、三八年「南方郵信」という作品を中村地平が発表いたします。これは芥川賞候補になっても、選から漏れました。午前中では河原先生への質問で、なぜこの二つの作品が芥川賞を受賞できなかったんだという質問があったりして、関心の深いところであります。さてこの中村地平が「土龍どんもぽっくり」とか、「南方郵信」というような作品を手がけるようになった背景について少しお話して次の座談会の方に進めていきたいと思います。
　実は、太宰治とはとても仲が良く、井伏鱒二のお家でしょっちゅう会って、中村地平はお酒が飲めなかったようですけれども、一緒にいろいろ飲み食いしたり将棋を指したりしていた仲の良かった二人に、大きな亀裂が入る事件が起こるんですね。それは、太宰が鎌倉で自殺をしようとして縊死未遂に終わってしまうことがあったんですが、そして太宰治の自宅には井伏鱒二をはじめ檀一雄とか中村地平とか皆が集まって、「まさか」と、最悪のことを心配しながら太宰治の帰りを待ってるっていう、そのことを小説にした地平の「失踪」という作品があります。この「失踪」は言わば、当時はざらにあったモデル小説なんですね。太宰のことを、その「失踪」という小説に書くことによって、二人の間に大きな亀裂が入って、やがてそのあと太宰治が中村地平に手紙を出す。それは残ってないんですけど、大

変な怒りを込めた、あるいは憤懣を発したような手紙であったようです。

そのあと、中村地平は「太宰治へ」という作品を、『日本浪曼派』に発表するんですね。そして、しばらくして今度は太宰治が「喝采」という作品で、中村地平のことを、実は大変戯画化して茶化して馬鹿にして書く。というようなところから、だんだん太宰治との仲が悪くなってきて離反していくんですが、その進行の背景と中村地平文学の変容の方向性が少し重なっていく。実はそれまでに、中村地平は都会の心理主義小説、男女のどうしようもない悪性がもつれた、男女の愛の悲劇を書いて、人間の男女の心理の断末魔のような作品を書いているんですね。「悪夢」とか「陽なた丘の少女」というような、これは午前中の河原先生のお話もありましたけども、同棲しておりました真杉静枝という女性との関係が裏にあって、彼自身は悩んでいた。真杉静枝っていうのは、実際に七歳も年上で、男性関係の、評判の良くない女流作家でもあり、世間では石川達三の「花の浮草」だとか、現代では林真理子が「女文士」というような作品でモデル化して書いております。中村地平自身は、例えば「悪夢」という小説では、都会の男女の悪性、どうしようもない男女の仲を書いた中で、ある恋人同士が心中を起こし、男だけ助かろうとして、女の方がその男の足腰に取りすがって、なんとかして自分だけ助かろうとする男の腰に縋り付くような場面があったりするわけです。どうもこれは、ある見方をすれば太宰のことをモデルにした熱海の心中未遂事件とかあるかもしれない。それで大きな亀裂が入りまして、そのあと実はその「失踪」という小説の中でも、ちょこっと出てますけど、中村地平が南方文学へ、都会の心理主義小説から南方文学へ転向していく大きなきっかけになった事件でもあります。「北の太宰、南の地平」という発想は、どこから命名がされたかということも少し議論にもなったんですけども、実際にはその「失踪」という小説の中では、「北枝の白き花」なる津軽の太宰に対して、南国の花として自分の位置付けをし、自分自身は南方文学へ大きく舵をとっていく。新しい文学への転向は、太宰治との亀裂が大きな原因になっていたわけです。お話をかえます。

一九四一年から四二年にかけての「戦争体験と文学」っていうところに進んでいきたいと思います。実際に南方文学というものを、自分の一種のトレードマークとして新しい文学を展開しようとした経緯はざっとかいつまんでお話しましたけれども、実際にいよいよ戦争が始まっていく。一九四一年から四二年にかけて南方戦線への徴用と、シンガポールでの反日華僑の虐殺事件という話になっていきます。そこに進む前に、ここでいったん会場から質問をお受けします。

【館長】はい。一点お聞きしたいと思います。中村地平が戦後、宮崎に引き揚げてきてから、『河童の遠征』とか、『日向民話集』とか書いてるんですけれど、台湾で過ごした時期に、その原住民の方々のこと、それから塩月桃甫からの影響、そういったものが日本に帰ってきて戦争で宮崎に疎開して、そのあと書いた作品にどういう影響を与えたのかっていうようなところを、ちょっと知りたいなっていうのがあります。その南方文学から、私小説へ転向したという分析がされてるんですけれども、南方文学が、その後、本当にもう中村地平の中から消えてしまったのか、それともずっと何らかの形で残って、その後の作品にも影響を与えたのか、その辺がもしわかったら教えていただきたいと思います。

【小松氏】僕たちが今年六月に『中村地平短編小説集』を復刻・出版したんですけど、その中の「告別式前後」っていう作品を読んでもらえれば、塩月と中村地平の台湾時代のこと、引き揚げてからのこと、死ぬまでのことがわかるので、どういう影響を受けてたかは、ぜひそれを読んで欲しいと思います。塩月赳、塩月桃甫の長男と地平は同級生だったので、いつもアトリエに遊びに行っていて、何かそこに原住民のものがいっぱいあったと、いろいろモデルが来てたとか、いろんな文献が残っていたので、塩月桃甫からの影響はかなり受けてます。

【河原氏】中村地平が南方文学の樹立というものを文章化したのは、実は一九四〇……そうだ、台湾に再度行ったあとですね。戻ってきて「長耳国漂流記」を『知性』という雑誌に発表するのですが、その発表する前の号で初めて、それを言うんですね。やはり台湾に行った、そしてそこで台湾を扱った小説を書くことが自分にとって非常に意味のあることだというふうに感じたんだろうと思います。ですから、いわば九州のことを書くのが南方文学の樹立では、私はないと思うんですね。むしろ九州のこと、自分の郷里のことを書くのは、地方文学としての樹立と思うんですね。意識として南方文学、彼の頭ん中にある南方文学は台湾だと思います。戦後は台湾が日本の植民地でなくなりますから、南方文学の樹立そのものは途切れてしまったと思います。

その代わり、この宮

崎及び九州の話をできるだけ彼は記録として残したい、皆さんに広めたいっていう意識が強くなったと、それはそれですばらしいことだと思います。

【小松氏】南方文学の定義が、結構いろんな研究者にインタビュー撮ったんですけど、それぞれちょっと違いました。そうですね。先生の考えだったり、台湾の研究者の人の考えだと、マレー半島やシンガポールの物語そして宮崎の物語もすべて入るという話もあったし、台湾のことっていう、結構南方文学の定義はまだ決めなくてもいいぐらいにあるのかなというふうに感じました。

【河原氏】だから具体的にどこまで意識してるかってのは、彼自身細かくは書いてないんですね。

【小松氏】研究者それぞれで、そこの答えが違ってらっしゃるので、あと戦争によってのところ、ですかね。私小説変更したところはもう、映画でも描いたとおりなんすけれど、先生からじゃあ…、難しいですよね。

【河原氏】難しいですね。同じような質問は、日大（日本大学での上映会）でも出たんですよね。

【小松氏】でしたね。

【河原氏】なかなか答えにくいです。

【小松氏】でも、僕は地平を追いかけて映画を作った感じでは、私小説や『日向民話集』だったり、地元、南方文学と日本の南進政策がやっぱりかぶってしまったので、そこで戦地でいろいろ見たことによって、そこでスウィッチしたような感じはありますね。

でも、スウィッチするときでも「支那娘ジン」とか、「馬来人サーラム」とか、徴用後に『新潮』や『文芸』にその戦地のことを発表しながら、『日向』と『河童の遠征』を書いている時期がかぶってるので、そこで、いちおうその戦地で見たことは書いて発表し、作品を選考しながらそのタイミングで宮崎に帰ってきてるので、やっぱりそこの本当に徴用後の二年間で、いろいろ変わっていってる感じはあります。

【河原氏】報道班員として作家たちが南方にいっぱい行くわけですが、彼らが行った先で、たくさんいろんなものを書いてる中で、地平はやっぱり違うんですね。生々しい状況というのをあえて避けてる。むしろ向こうの現地の人々の生活というものを、自分の生活と結びつけながら好意的に書いてる。

【小松氏】自分が関わった華僑や、自分と関わったマレーシア人の話を書いてますよね。

【河原氏】そう。だから、そういう意味では、読んでて安心ですね。これが結構ね、ほかの徴用作家のなかには、戦意高揚のために書いた作品がたくさんあるんです。岡林先生だとその辺はよくご存じだと思うんですが。

【岡林氏】そうですね。実際に「支那娘ジン」とか「華僑

の人たち」という作品を書いてるんですけども、これは実際に現地で、いわゆる占領軍の侵略によって被害をこうむった人たちを、現地の人たちの目から書いている作品として評価され、これはもちろん南方文学の対象にはならないわけでありますけれども、ここで、中村地平がこの「戦争体験と文学」の中に出てきました、一九四一年から四二年の「南方戦線の徴用」というところを、再びドキュメンタリー映画の中の場面を、少し監督の方にコメントしていただきたいと思うんですが、昭和一六年一二月に、アフリカ丸でちょうど香港沖を通るときに、一二月の八日、いわゆる真珠湾攻撃の報が入るわけですね。その日の前後から、この戦争というものに対して、中村地平がすごくなんて言うかな、恐怖、戦争そのものを拒否する奇怪な行動をとるんですね。

実際、中村地平自身の文章じゃなくて、これは井伏鱒二の文章で、地平の発言として映画の中でも使ってるんです。それで戦争も知らない小松さんたちの、中村地平が、自然がこんなに美しいのに戦争をなぜするんだろうという、独白体で語られているあの場面等の構成の仕方、あそこにこの独白を入れた監督の意図をお伺いしたいと思います。

【小松氏】はい。シンガポール編を撮影して、どう表現していくか、僕たちやっぱり表現者なんで右も左にも寄れず、やっぱり真ん中からしっかりと事実を伝えていく、そういう表現をしていきたいと思ってるときに、いろんな戦争を追っかけてしまうといろんな出来事がやっぱり分かってきてしまって、どう表現するかっていうのは毎回みんなですごく悩むんですけど、結果的にもう地平がどう思って、どう生きたか、どう行動したかっていうところを出したかったので、やっぱりそこは地平のターニングポイントになるんではないかなと思って使いました。

【岡林氏】実際は地平が書いてなくて、ずっと行動を一緒にした井伏鱒二の描写によって、うまく脚色して本当のことを表現してくれたと思うんですけども。戦争の時代を、戦争を知らない若い世代が描くってのはとても難しいと思うんですね。ちょうど今映画の話になったから、そこに再び話を進めていきたいと思います。映画の中で八紘一宇の塔の内部を流すところがあります。塔の中に入っていって、日名子実三の彫刻についてのコメントとか含めまして、あそこは僕たちと違って、これでも僕は昭和一七年生まれだから、戦争中に生まれた、戦前派と言われるほどの実感はないんですけども、やはり四〇代の小松さんたちが、あの映画で挿入したあの場面っていうのを、特にあの日名子さんという美術家としての、監督の目から見た、ただ単に歴史の遺物としてあれをとらえるだけじゃなくて、大々的に反戦思想みたいなものをモロに出してないんですけれども、若い編集者たちが作り上げた字幕スーパーの中に、あ

そこには昭和一五年当時の空気を持っていた、包んでいたっていうような表現があって、精いっぱいの、しかし胸に訴えるような場面であった。八紘一宇の塔の中にある彫刻の像の美的なもの、感覚的なものと、そして、政治的な意味合いについて小松さんの方から少し……。

【小松氏】はい。今回、宮崎市制一〇〇周年と置県一四〇年ということで八紘一宇の塔の中の、日名子実三が作った作品レリーフを映画の中で、映画に出すのは初めてだったと思うんですけど、使わせていただきました。

日名子実三って一人のアーティスト、芸術家として作品は素晴らしくて、だけど僕たち世代ってあの塔のことを知ってるようで全然知らないんです。その辺、触っちゃいけない空気もあるので。ただ、日名子実三のアーティストとしての作品としては素晴らしいので、作品として映画の中で紹介させてもらって、実際に塔の中に入ったら、昭和一五年の紀元二六〇〇年祭のころの何か空気を感じたというか、そのまんまで、僕たち撮影組も結構驚いたんです。あれで映画が一本撮れるぐらいの、もちろん霧社事件でも一本撮れるぐらい。やっぱり作家の作品として見られてないところは、ちょっと同じアーティストとしてかわいそうだなっていうのもあって、だから芸術作品としてどう見るかとか、そういうのをちょっと若い人たちに向けて示したかったですね。でも若い人にはなかなか映画見てもらえてない。

【岡林氏】実際は映画の中では、「昭和一五年当時の空気を今も内に抱いている。戦前から残るこの芸術作品と次の世代がどう向き合っていくのか」っていう字幕スーパーを残しております。とても印象的であったと思います。若い人も見えてるんですけど、ここでもう少しまた映画の方に話を進めたいと、小松さんに聞くんですが、やはり若い人たちに何か、僕の周りにもいるんですけど、映画ってこんな田舎で俳優さんもいないのに、どうして作ればいいんですか、お金はどんなふうにすればいいですかって、幾らぐらいの費用だったんだろうというふうに、直接疑問をぶつけてくる人もいたんですけど、今回の日州グループによる、小松さん率いる、このスタッフたちによって完成にまでこぎつけたんですが、実際に自分たちが映画を作りたいという若者たちに一つのヒントになるような、完成までのプロセスについて、もちろん脚本などの準備があってロケがあって編集があって、さらに上映までしていくというようなところを含めて、エピソード、裏話もあれば話していただけますか。

【小松氏】ドキュメンタリーっていう形、ノンフィクションで、事実を歴史とか人の記憶で追いかけていく形をとってるので俳優とか演者はいらなくて、台湾とか宮崎県もそうだし、昔を知る人たちやこういった研究者の人たち、行

政、図書館や美術館と協力させてもらって事実を暴いていくっていうのがドキュメンタリー映画のいちばん面白いところで、お金はめっちゃかかります。一〇〇人ぐらいの人が制作に関わって上映は八〇分しか使えないけど、それの何十倍も撮ってるので、ほんと使えなかった場所もいっぱいあるし、ただ何かたまたま運よくいつもスポンサーが集まるんですよ。何十社か、いちおうこういうことをやりたいんだっていうプレゼンをさせてもらうと、ある程度企業さんたちから支援を得られる。どうやったらつくれるんだって言われても、たぶん、普通の人には作るのは結構難しいと思います。

【岡林氏】その資金集めに多くのスポンサーの方が賛同してくださったわけですけど、そのためにどんな形のプレゼンをしたんですか。資金集めの段階で、難しい話ですか。

【小松氏】とりあえず偉い人を待ち伏せしといて、とっ捕まえて「五分、話を聞いてください」と言って、情熱と、こういうことがしたくって、こういう人がいてこういう人がこんなに台湾で評価されてるのに、日本の人は忘れてて、宮崎の人もあんまり知っている人がいないんですよ、みたいな。熱量ですかね。飲み会のときとかも、偉い人を見つけるとガンガン行きます。

でも、毎回二〇、三〇社の支援を取って作ってますけど、その三倍ぐらいの人に断わられてます。

【岡林氏】河原先生、映画に関して感想が何かあれば。

【河原氏】本当助かります。映画の影響力は計り知れないくらいあるわけですので。桃甫にしても、地平にしても、映画だから皆さん分かるわけで、東京の人たち、私たちの周りでは、桃甫も、地平も知ってる人を探すのは極めて困難な状態ですので。

【岡林氏】少し映画からまた離れて、「戦争体験と文学」に戻る前に、一九四一年から四二年にかけて南方戦線の徴用中に、シンガポールでの反日華僑の虐殺事件っていうものをモロに見てしまったことについて一言つけ加えます。地平はいわゆる戦争というものを、特にこの事件については一言も帰国してから触れてないんですね。だから、これが大きなターニングポイントになっているのにかかわらず、僕たち研究家としては、その虐殺事件目撃の客観的な資料がなくて、何か、井伏鱒二の『徴用中のこと』などの傍証によって実証してるようなことでありますけども、この事件によって大きく中村地平の文学が変わっていくということについては間違いないと思います。

そして二番目からのお話に進めていきたいと思います。昭和一七年末に帰国して「疎開・結婚・家庭人としての地平」っていうものが展開していくわけですけども、昭和一八年の二月には森代議士（森由紀夫）の娘さんとお見合いをして、すぐに結婚する。そして、昭和一九年には長女

弓子さんが生まれる。そして宮崎県に疎開して帰ってくる。そして、あの宮崎に帰ってきての話ですけども、また少し映画にも戻るけども、宮崎市が空襲に遭う事件、その映像がありました。小松さん、たくさんの爆弾が落とされるシーンというのは宮崎市の野島（のじま）、内海（うちうみ）だったんですか。空港、赤江空港（現宮崎空港）ではなかったんですか。

【小松氏】映画で使ったのは内海の機銃掃射をされる米軍のガンカメラと、あと赤江飛行場が空襲されてるところの米軍の映像は使いました。

【岡林氏】そして帰国して、宮崎で生活をしていく中で、もう一つ重要なことがあります。実はここで塩月桃甫との関係を。戦後、塩月桃甫も台湾から宮崎県に帰ってくる。それこそ当時は、荷物は三〇ｋｇ以内と、ごく少ない荷物しか持ってこられなくて大変だったようでありますけれども、宮崎に落ち着くときにも、戦災者用の、いや引揚げ者用のバラック住宅の中に住んでいる。六畳一間に、あと炊事場がついてるような住居でした。実は塩月桃甫が住んでいるところを何度か、自分の恩師ですから、地平は訪問して、いろんな仕事を探してあげるんですね。それと別に、当時中村地平は小説の書けなくなってた時期でもありまして、その芸術家の情熱っていうものはどっか胸の奥の方で澱んでいたなかで、ちょうど夏場にバラックの家を訪ねる場面がありまして、塩月桃甫がパンツ一枚になって、ねじり鉢巻をしながら一生懸命に描いてる姿を見るわけです。その姿を見て、はたと中村地平自身は自分の芸術への、その創作への道はどうなってるか、という自らの姿に気づかされるところがあります。それは「告別式前後」という作品の中で書いております。塩月桃甫から中村地平につながる一つの重要な場面でもあり、それを画家として小松さんは、あの場面をどういうふうに見ましたか。

【小松氏】地平が帰ってきて、図書館長をやったり、戦後の復興の教育だったり、日向女子自由学園をつくったり、すごく忙しい時期。いろいろ戦争で本当にひどいものを見たから自分の力が及ぶ範囲で教育、文化、経済、宮崎の復興しようとしてるときに、ちょっと小説家としてあんまり書けない、活動できない時期に塩月桃甫を訪ねて、まだ本当に台湾時代と変わらないぐらいの創作への情熱がある。塩月桃甫はですね。当時、外地手当六割加俸の時代に、台北高等学校と台北第一中学校二校の先生をしてたんで、台北でも洋館の豪邸に住んで、芸者を連れ歩いて、毎日絵を描いて、すごい伝説がいっぱい残ってる。それを知ってる地平が戦後に引揚者住宅の六畳一間でド貧乏で絵を描いてる姿を見て、地平も作家としてまたやろうっていう、なんかそういうシーンですよね。そこは、地平にとっては戦後のターニングポイントだったのかなと。これは映画を見て

欲しいけど、「告別式前後」を読んでいただくのがいちばん当時の空気とか、当時の宮崎がいちばん伝わってくると思います。

【岡林氏】そしてそれと関連するんですけれども、その中で、中村地平が塩月桃甫のために、当時高鍋中学校で非常勤の絵の先生をお世話するんですね。当時（旧制）高鍋中学校ですね。それで、そんなふうに一生懸命、就職を世話した中村地平であったんですけど、ある日突然、塩月桃甫が辞めたっていうふうな報が入るわけ。どうしたことかと思って問いただしてみると、「いや、僕はあの汽車通勤の時間に、絵を描く時間が奪われるんだよ。もっと描きたいんだよ」っていうような一言に、さらに中村地平にとって寸鉄の響きがあって、自分みずからに活を入れられたように捉えられた事件でもあった。

これは「告別式前後」、お母さんが亡くなってすぐ後に、塩月桃甫が亡くなりますので、そのことを書いた作品でありますけど、ぜひ読んでいただきたい。

それから、「戦争体験と文学」の三番目に入りますけども、その長女の危篤と生命の復活も、これも彼の文学への大きな転機を迎える事件であったわけです。

実際、今からお話しますけども、このとき小林の方に母親と再疎開していた長女・弓子さんが、当時、疫痢と言ってましたかね、赤痢にかかって、もう重篤な状態になっている。地平は、それを遠く離れて宮崎市内から心配している。手紙は何度か小林の玲子夫人に宛てて、それが今日の特別展示室の中にも、その書簡がそのまま直に置いてありますので、これぜひ読んでいただきたいと思います。手紙の中の文章を見てみると、とても中村地平の今までの作品の中に無かった、子どもを思う気持ちがこんなにも切々と伝わってくる。涙が出るほど長女のことを心配してるのは当然でありますけども、かなり玲子さんに、奥さんに対して厳しい言葉を投げかけてるんですね。びっくりするようなところもありました。しかし、「子供の像」という作品の中で書いてますけども、これも映画の中で最後の方で取り上げてくださっているわけで、子どもが重篤な場面から復活する、彼自身の戦争体験、日本は負けたんだという、その敗戦、廃墟の中からの復活、敗戦の中からの文化復興、それらのきっかけになるような大きな自分の身辺の体験であっただろうと思います。その長女があの瀕死の状態から見事に立ち直って、戦後マルマルとした肉付きのいい体で庭を走ってるのを見て、思わず何かうれしく、言ったら不謹慎になるけれども、「敗戦もまた楽し。」というような言葉さえ使いながら、敗戦の中で自分も復活していくんだというような、ここはやっぱり監督としても大事なところと捉えて、とても感動的なシーンになっていると思いますが、その「子供の像」からさらに「八年間」とか、さらに大事

なことは私小説への転向というところでありました。実際に「山の中の古い池」は、戦争中に河童家族の一員という形でフィクションを使いながら真杉静枝のことも書いている。あるいは未完の小説として死後発見された「発端」は、真杉静枝との後日譚で、晩年に真杉静枝が癌になって、中村地平にも昔つき合いがあったんだろうという形で、手紙と御見舞のための奉加帳が回ってくるところも書いている。この「発端」という小説は、『ポリタイア』っていう雑誌の中で没後発表されたものでありますけれども、そのあたりを見るとやはり、彼が私小説で自分の身辺をテーマに作品を展開していく作家になった背景として、やはり戦争体験というものがあったことを改めて感じる場面であります。この戦後の作品について何か、河原先生なんかコメントしていただけると…。

【小松氏】今年地平の手紙がね、去年か、見つかりましたもんね。その時の。

【河原氏】そうそう。

【岡林氏】手紙のことね。

【河原氏】とにかく資料がね、まだまだ足りない。作品も「八年間」で、真杉のことも書いてるけれども、奥さんのことも書いてますよね。作家ですから半分真実で半分フィクションである部分があるから、そこをどうやって切り取り、理解していくかです。

【小松氏】先日、手紙が実際に見つかったじゃないですか。小林と行ったり来たりしてる、終戦前の状況の手紙の中に、普通に小林から宮崎市に帰る途中、高岡の花見のところでトラックが故障して、歩いて帰ってたら戦場坂のところで空襲に遭って夜中になっちゃいましたみたいに書いてあったり、弓子さんのことがこうでこうで、和田大佐に助けてもらった、軍医さんに助けてもらったとか、そういうのは、手紙のまんま小説になってる。だからたぶん、自分の小説はね、そのままんじゃないかなと思います。

【岡林氏】実際の資料としてね、特別室の展示の中に入っておりますし、よく見ていただきますと、手紙の便箋はというと、「大政翼賛会宮崎支部」専用の便箋に書かれてるんですよね。いつまでも戦争を引きずっている背景も、戦時体制を引きずってる事実もありまして、やっぱり資料というものがいろんなものをもの語ってくれる意味で、今回の特別室での展示については、またもう一回、一回でわからないので僕もう二、三回見てみようと思っておりますし、さらに資料を使って新たな評伝の書き加えもまたできるような、そんな気さえします。

【小松氏】河原先生にぜひ質問ください。

【質問者Ⅰ】二つあるんですけど。私、大学時代から台湾にずっと居て、台湾に一二年ぐらい居て、最近宮崎に帰ってきたんです。二〇年ぐらい前に初めて台湾に行った時に

は、まだ日本語しゃべれるおじいちゃんおばあちゃんとかがいっぱいいて、日本人ありがとうありがとうみたいな感じでした。いま台北に五〇〇〇人ぐらい日本人（現在は九五〇〇人以上）がいるんですけど、日本人同士でだいたいみな知り合いなんですよ。みんな保守的な考え方で。もともと私たちの時代って、日本は悪いことしたという教育ばっかり受けたんですけど、台湾に留学して台湾に住んで、日本ってすごいと思って、日本大好きになって帰ったんですよ。それで、八年前日本に帰ってきて、何か台湾にいる日本人のその空気感と全然違って、日本人って日本にすごい自信がなくて、それで、私こんがらがってしまったんです。今も、小松先生の映画「塩月桃甫」だったりとか、映画「中村地平」もそうだし、あと映画「セデック・バレ」（霧社事件を描いた台湾映画）とかそういうのを観て、やっぱり日本って悪いことしたんだという気持ちもどんどん増えてきて。なんかそういう、この今の私の頭がこんがらがっている感じを、先生たちもたぶん持ってらっしゃると思うんですよ。さっき小松さんが言ったのとちょっとかぶるんですけど。それと文学と、どうやって両立されてるのか。

それが一つと、あと大学のときに、台湾の先生に教えてもらって、私の場合は大学の卒業論文は「日本統治時代のインフラ」というのを書いてたんですけど、全然資料がなくて、台湾に行って邱永漢先生の図書館とか、あちこち探してもなかなか資料がなくて、河原先生すごい長い間勉強されてると思うんですけど、そういう資料とかを、どうやって探して今に至ってるのかなと思いまして質問しました。

【河原氏】後の話の方が、お答えしやすいです。私が台湾のことをやり始めたときには、本当に資料がない。書店へ行っても何もないんですね。先行研究もないし、だから資料集めでまず苦労しました。台湾に行くたびに、クーリンチエ（牯嶺街）というところに行きました。古本屋があり、路上での販売もあるんですね。雨が降れば路上ですから店が出ないんですけど、リヤカー一つに積んでくるような、そこに時間のある限り行って、それでかき集めて、地方都市でもそういうところへ行ってかき集めて、それでも文学資料はないんですね。あっても、汚かったり破けてたりでした。台湾大学の図書館には幸いにして、その時に歴史研究で有名な方が館長

だったんで、それで書庫にまで自由に入れていただいて、それから考古人類学系の図書室にも入れてもらえました。なおかつ中央研究院の方も民族学研究所とか、文哲研究所とか、いろんなところに行きました。とにかく足で動くしかない。それで、集めた資料は台湾から送り出すんですけど、印刷品として送り出せるのは五ｋｇまで。五ｋｇってほんのちょっとなんですね。ですから、行くたびに買ってくる、あるいは貰ってきたりする。多いときは四〇箱ぐらい送り出すという感じで。

幸いいろんな人と出会って、当時まだ文学者で健在な方々もいたので、そういう人たちの縁故で、本当に今では会えないような方々にお会いして、ですから台湾文学研究を手がけた段階が早くてよかったということです。それが大きな言わば財産であり収穫です。台湾文学を手がけ始めたんですけれど、最初はわからないんですね。わかる範囲で、とにかくまとめていくという感じでした。今みたいにネットで調べるなんて簡単にできるわけじゃないですから、大変でした。

一方、どういうスタンスで研究するかは大事なことで、当時は戒厳令下でもありますから、文学者の中には警戒されて、なかなか会ってもらえなかったりすることもありました。日本人の台湾文学研究というのが、どうしても警戒されるんですね。それから、台湾の学会で発表しても、日本人としての限界じゃないかって後で言われたりするんですね。とにかく中立的にどこを、どういう研究をするかということを常に考えながらやってきました。そういうぶれないような見方をすることが、研究を長くできた秘訣だと思います。

歴史研究も台湾史の研究自体は、台湾では当時まずできない状態でした。ましてや文学の方のところ、特に日本統治時代の台湾文学研究は、ほとんどやられていなかった状態です。ですから、そういう中で台湾に頻繁に行けたのと、大学院に入ったときは大学の先生が理解のある方で、「自分の授業には出なくてもいい。他の先生の授業に出たら、そのレポートをコピーして同じように出してくれればいい」と言ってくださり、単位をそれで頂戴して、半年ぐらいは台湾に行ったり来たり出来たのが研究するには非常に有り難かったです。

とにかく、資料はどこにあるかと探し回る。日本近代文学館がすでに出来ていましたから、文学館の書庫に入れてもらって、探しました。一冊一冊手に取ってみると、思いがけない資料にぶつかる。あとは日本国内でも古本屋めぐりをしたり。東京では毎週のように古書の即売展がありますから、そういうところでも資料収集に努めました。とにかく集められるだけ集めて、それでそうしてるうちに輪郭が見えてくるという感じでした。だからずいぶん時間はか

かりましたが、幸いなことに自分の前に台湾文学を研究してる者は全くというほどいないので、先行研究を気にしないで自分のペースでできたっていうのは有り難いです。今だったら、例えば霧社事件の研究をするとなると、霧社事件に関する研究は実に多いわけですね。それらを読まなきゃいけないんですけど、そういうものを読まずに、物が書けたからスピーディーにできたという感じです。他に、ご質問があれば。

【質問者Ⅱ】一つだけお聞きしたいんですが、河原先生にですね。台湾における、卒業生の中にですね、作家にもなられた邱永漢さんとかいらっしゃいますね。そして、小松さんの映画のポスターのいちばん右に中川一政さん、その彼の装幀された本が相当数あると思うんですね。ですから中川一政さんの輪郭というか、そういうものを少し教えていただければ。

【河原氏】それは、…分からないです。小松さん…。

【小松氏】それは仲良しだったからでは。紀元二六〇〇年祭の前年の昭和一四年に、日向観光協会が中村地平と一緒に、井伏鱒二と上泉秀信と岡田三郎と尾崎士郎と中川一政を呼んで、それ地平が選んでたので。戦前の地平の本の装幀は、中川一政がかなり多いですよね。

【河原氏】そうそう、戦前にかなり、ええ。

【小松氏】戦後は塩月桃甫が描くことが多いですね。

【河原氏】かなり出てますね。

【質問者Ⅱ】ですから、午前中にいただいたこの資料の中でも、塩月桃甫さんの装幀、表紙がたくさんあるのは分かりますが、この中川一政さんがどうしても気になってですね、お聞きしたところです。

【小松氏】中川一政は、今ではメジャーな画家ですね。でもたぶん、杉並文士ていうんですかね、あの辺のグループで仲が良かったっていうことですよね。装幀をあれだけ描いて。

【河原氏】本当に、本来ならば、彼に装幀してもらうなんて相当高いですよね。

【小松氏】当時みんな若かったから。でも若山牧水の本の装幀の中にも中川一政ありました。

【質問者Ⅱ】僕は、作家の向田邦子さんの家に行ったときに、入ってすぐに中川一政さんの絵がありました。ものすごく印象に残ってるんですね。

【岡林氏】はい。神奈川にあるね、真鶴町（中川一政美術館）に。

【河原氏】そう。素晴らしい絵がたくさんありますよね。

【質問者Ⅱ】ありがとうございます。

【質問者Ⅲ】ちょっと二つあって、どなたでもいいんですけど、今日この手元の資料にある、これ「考えてみよう」のところに、「弱者であったことが文学の世界の出発点」っ

ていうのがあって、岡林さんの資料なので、岡林さんの考え方なのかなとは思うんですけれども。何かこの話、まだ何か無茶苦茶だったっていうことがですね、その中であんまりピンときてないところもあって、太宰治はそんな弱者のようなふりをして文学を書いて、それが「人間失格」のような形で今でも高校生が読書感想文で書くというような話はわかるんですけど、中村地平も弱者であると捉えるっていうことに対する考え方を、この後もしかしたら話があるのかもしれませんが、その点をちょっと聞きたいなっていうのが一つと。

もう一つは、さっき研究に携わってもう何十年とか、大変なご苦労というかですね、お話を聞きまして、それから映画の撮影に関する裏話もありましたけれども、何かこう、一方で、いかに明らかに出来ていないことが多いかとか、いかに撮れないものが多いかっていうことの自覚というか、葛藤のようなものもあったと思うんですよね。幾ら調べても調べても、わからないっていうのがたぶん研究だったと思いますし、映画もですね、撮ってるもの以上に短いアップしなくちゃいけないから、だいぶ切り捨てた形でなってると思うんですよね。でも、論文を書く、論文にまとめるとか、映画にまとめるっていうその喜びもあると思うんですけど。わからないとかですね、捉えきれないなっていうその葛藤の部分で、何かお考えがあったら聞きたいなと思います。以上です。

【小松氏】弱者と捉えているのはたぶん、岡林先生の方で、僕は北のぼんぼん、南のぼんぼんって思ってたんで、太宰と地平は。あんまり弱者だとは思ってなかった。

【岡林氏】文学作品のほとんどが、弱者であることの認識があるからこそ、また弱者であるふりをして文学作品を作るってことも含めて、それは可能であると思います。ずっと見てると、すごく強いと思った中村地平は、図書館で働く場面ですね。図書館の業務に関してはかなり実務面での強さを感じるところがありますけれども、やはり銀行に関しては、病気の進行もあったけれど「弱さ」が。

言わせてもらえば、文学作品を作っていくっていうことの基底にあるのは、僕自身の論文にもあるように、そう、この弱者であることが文学の出発点に。そもそも台北高等学校の受験のところから始まって、それで彼が初期に書いてる「悪夢」とか「陽なた丘の少女」とか、もうことごとく人間の罪、弱さについて、そこを出発点とした作品が多いというものを見ますからね。反対に「南方郵信」とか「土龍どんもぽっくり」っていうのは、意外と人間の強さっていうもの、永遠の相の下で古代南方人の強さっていったものを底力として見ているところもあると思います。以上、わたしの持論ですが。

【河原氏】葛藤の件ですけれども、調べた結果どうしても

書けないものってあります。これを書いたら個人の尊厳を傷つけるというものがありますし、これを発表すると社会的にかなりマイナスな評価というか、誤解を招きやすいというのがあります。その辺のギリギリのところでは、いろいろどうしようかなあって考えるんですが、時期が経つと書けるものもあります。

映画の中でも、霧社事件についての資料は、小松監督にはお見せしたんですが、実に生々しい写真があります。首だけいっぱいあるとか、あるいはミイラ化した死体があるとか、そういうものがあります。それから、そういうものがあるんですけれども、出せないものは出さない、出さないほうが賢明だと判断することがあります。

研究者というのは意外といろんなことを暴露したがるんですね。中にはこれを出したら、本当に本人を傷つけるものもありますが、台湾の研究者の中には平気でそれを発表する人もいます。けれども、私としては、そこは線引きをきちっとしているつもりです。

【小松氏】表現の自由、僕も本業がアーティストなんで、やっちゃいたいっていう気持ちはあるんですけど。例え話で言うと、霧社事件すら前は触れなかった時代があって、今はちょっと触って確かに当時の映像だったり写真を手に入れて全部出すことも一瞬は考えました。制作中は、仲間たちと、東京の先生たち含めて、僕は勝手に「審査会」って呼んでるんですけど、僕がちゃんと中立から表現できてるかどうかを審査してもらう人達が一〇人ぐらいいて、そこに見せたときに結構チェック・意見をもらうんですけど、例え話でいうと、霧社事件の、最初僕は、反抗した原住民が縛られて集められて、日本の警察官・軍隊かどっちかに囲まれてる写真を使おうとしていました。だけど、その審査会から来た意見の一つでやっぱり止めようと。ちょっと心に響いたのは、ああいう事件が起きたこともあったけど、当時、その蕃地・蕃社には警察官が駐在して日本人の教育をしたりしてたけど、原住民の子供が病気になったときに、もう必死で台北の町まで行って薬を買ってきて、原住民の子供を治してあげたりとか、なんかすごくいい話もたくさんあるのに、その写真一枚ですべてが見る人が霧社事件オンリーでぶっ飛んでしまう、という意見を言われたときに、本当に自分が真ん中から表現できているかっていうのは、もう毎回すごく何かわからなくなっていく。自分が、それはすごくいつも闘っています。

【岡林氏】監督の証言としてはいちばん重みがあり、初めて聞きました。その話は。そろそろ時間が参りましたのでまとめなきゃいけないんですけれども、先ほどの台湾の大学に留学した方の質問の中で、やっぱり一番目の質問に関しては、僕たちが、例えば台湾に今行っても、道なんか迷ってると丁寧に教えてくれていろいろと親切なんだけど、一

方で、例えば旧日本家屋の写真をどんどん撮ってると、お前何してるんだというふうに言われることもある。

僕がいちばん現代の台湾の人々の心、心情を見事に伝えてくれてると思う、現代の短歌を披露します。

『台湾万葉集』という短歌集の中の一首で、「すめらぎ」ってのは天皇陛下のことです。

すめらぎと曾（かつ）て崇（あが）めし老人の葬儀のテレビに瞼（まぶた）しめらす

要するに、天皇陛下の、昭和天皇の葬式、テレビに映った葬式で涙している。それを、「曾て崇めし老人の」という、そういう表現の中に、すべての万感の思いが込められてるような気がいたしまして、先ほどの一番目の質問に対する答えとしておきます。

【小松氏】まだ質問あれば河原先生に、もうせっかくなんで。

【質問者Ⅳ】ありがとうございました。私、昭和二三年の生まれなんですけども、川南町という、〇〇なんか〇〇があった。昭和二三年なので今七六歳になりますけども。お三方から、これは宮崎県の出身の方、台湾との交流とかいろいろ聞きまして、非常に感慨深い思いに浸っております。考えてみますと、私も含めて、子どもも孫も、これから先、三人の話をされたようなことが自分の原体験として、何か自分の生き方を変えることがあるんだろうかとずっと思っとったんですよ。私も話を聞きながら、霧社事件とか、それから太宰治の「喝采」とか分らないもんですから、スマホ横に置いてたんですけど、スマホを見てわかったような気になる。

一方で、やっぱりこうして研究者の方や、美術家の方や、いろんな方法で資料を通して自分で勉強して皆さんに伝えようとしておられる。本当に敬服しました。これからも三人のご活躍をお祈りするんですけども、私は宮崎においては図書館が文学館なんだと思っております。ちょうど関係の方もおられますので、ぜひ図書館のあり方として、資料の収集、それの発表、それを後世にどういうふうに伝えていくのか。

図書館の、こうしてたくさん来ておられますんで、これからも大事にして、図書館の関係の方、ひいては自治体の資料の収集、また発信そういうことに頑張って欲しいなと考え

たところです。ありがとうございました。

【岡林氏】ありがとうございます。なければ、もう一人ありますようです。

【質問者Ⅴ】僕は映画を見て、中村地平さんとか南方文学って初めて知ったんですけど、南方文学って、文学の一ジャンルなのかなと思って調べたら、プロレタリア文学だとか、郷土文学とか、戦争文学とかいろいろありますけど、ただ調べると中村地平さんの名前しか出てこない。しかもその中村地平さんのある一時期の作品傾向の話なんだと。その南方文学をどう捉えるかってのがよくわからないのが一つです。

あともう一つは、中村地平さんの、特に宮崎に帰ってきてから以降については、果たして文学者、もしくは小説家と言えるのかなというのが正直あって。郷土である宮崎の文学者がいて欲しいって気持ちはあるんですけど、ただ何か冷静に見ると、果たしてこの方は途中からもしかして文学者じゃなかったんじゃないかなっていう気もしてまして。その辺のところを忌憚なく教えていただきたい。

【河原氏】文学を志す文学者になりたいという気持ちは、地平の心の中に根強くずっとあったと思います。ただ、東京を離れて宮崎に戻ってきてからは、中央文壇といわば疎遠になる。しかも宮崎での様々な文化活動に携わるし、喀血したということもあって、自分が考えてるような創作活動には携われなくなったというふうに言える。だから、多分に心残りだったと思います。

それで、南方文学というのは、プロレタリア文学とか自然主義文学とかそういう分野の範疇で同時に並べられるものではないというのは、おっしゃるとおりです。ですから、あくまでもこれは一般受けするような表現ではないというふうに考えています。それについて、先ほどもお話しましたように、南方文学って何なのかということはそう簡単には明確にできないと、そういうふうに私は考えております。ありがとうございます。

【岡林氏】はい、他にはございませんでしたら、ちょうど時間になりましたので、それでは、よろしゅうございますかね。では、どうも長い間ありがとうございました。

【司会者】三人の方々、長い時間にわたって地平について語っていただき、ありがとうございました。

※文中の〇〇は、筆耕時に聞き取れなかった部分。
※※文中の写真は、いづれも鼎談会時のもの。